

日本作業療法士協会 海外研修助成制度

実績報告書

学会名：WFOT Congress 2026

演題名：Occupational Therapy Students' Learning Experiences in Acute Care Clinical Practice

会期：2026年2月9日～12日

開催地：バンコク、タイ

申請者

氏名：駒場 一貴

所属：昭和医科大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法専攻

会員番号：56023

所属士会：神奈川県

1. 発表演題の概要

【Introduction】

In Japan, there are limited studies on clinical practice in acute care hospitals within the field of physical disability, particularly regarding its educational impact on students.

【Objectives】

The purpose of this study is to examine the characteristics of learning that occupational therapy students acquire through clinical practice in an acute care hospital.

【Methods】

This study included 32 fourth-year occupational therapy students from the years 2022 and 2023. We retrospectively examined the Acute Care Rehabilitation Training Experience Table, which was independently created by our university, and analyzed the freely written responses on "what was learned" based on Berelson's content analysis method. The study was approved by the institutional Ethics Committee (approval number: 2023-101-B).

【Results】

A total of 100 record units were extracted and, as a result of the analysis, were classified into the following six categories. Clinical Skills (35.0%), Risk Management (27.8%), Knowledge (22.7%), Organizing Information (5.2%), Occupational Therapy Perspectives (5.2%) and Multidisciplinary Collaboration (4.1%).

【Conclusion】

Students learned clinical skill with an awareness of risk management. However, “occupational therapy perspective” was low at 5.2%, indicating that instructors need to place more emphasis on it in their education so that the occupational therapy perspective is not diluted in acute care.

2. 学会参加と発表の印象

このたび、OT 協会助成金を受けて国際学会に参加し、ePoster 形式で発表する機会をいただきました。今回の発表は「日本の作業療法教育、とくに急性期医療における臨床実習の現状や課題を国際的に共有し、各国の教育実践と比較検討すること」を目的として準備してきたものです。まず、このような貴重な機会をご支援いただいたことに深く感謝申し上げます。

発表形式が ePoster であったため、対面発表のように聴衆の反応が得られず、学術的な双方向性が乏しい点に課題を感じました。アプリ上では閲覧はできるものの、その場で質問や意見交換が行われなため、議論が深まりにくく、どのように受け止められたかを把握できないまま終了した印象があります。急性期作業療法という実践性の高いテーマであればこそ、対面で議論しながら理解を深めることが望ましかったため、この形式にはやや物足りなさを感じました。しかし、国際学会がデジタル形式を導入していく中で生じる新たな課題を実際に体験できたことは、今後の国際発表の在り方を考える上で重要な経験となりました。そのような状況の中でも、当初の目的であった「国際的な教育比較」を達成するために、私はアプリを通じて海外作業療法士に直接連絡を取り、対面での交流を積極的に試みました。その結果、アメリカの複数の施設に所属する OTR と直接お会いし、急性期および集中治療領域における作業療法の実践について意見交換を行うことができました。特に、Thomas Jefferson University Hospital、Stanford Medicine Health、University Medical Center of Southern Nevada、University of Arkansas for Medical Sciences など、急性期医療に強い施設の OTR の方々とお話しできたことは大変貴重な経験となりました。

アメリカの急性期・ICU 作業療法の特徴として印象的であったのは、1 患者に対して 1 時間程度のセッションを多職種と協働しながら実施している点です。早期離床や早期作業療法が医療システムの中に位置付けられており、作業療法士が急性期チームの一員として積極的に関わっている様子がうかがえました。一方、日本では人員配置の制約が大きく、1 患者に割ける時間が 20 分程度となることが多く、その点についてアメリカの OTR から驚かれる場面もありました。国として早期離床の必要性が認識されつつも、現場の人員不足が介入の質と量を制限している現状を、国際比較の視点から改めて認識することができました。また、日本では急性期領域で働く作業療法士の数が十分ではなく、ICU における介入が限定的であることも議論の中で共有しました。この状況は学生教育にも影響してお

り、急性期実習を担当する指導者が臨床業務に追われて十分な教育時間を確保できないことが課題として挙げられました。この点についてはアメリカでも同様の課題があるとのことで、国は異なっても急性期領域の作業療法教育が抱える構造的な問題は共通していると感じました。

今回の交流の中で、アメリカの OTR から急性期作業療法について体系的にまとめられた書籍「Occupational Therapy in Acute Care」¹⁾を紹介していただく機会がありました。病院ごとに実践に差があること、急性期教育が標準化されていないことはアメリカでも同様であり、日本だけが特別に遅れているわけではないという点を確認できたことは、今後の教育の方向性を考える上で大きな安心材料となりました。また、アメリカでも「作業の視点」を大切にして介入しているという話を聞き、作業療法の根幹部分は国を問わず共通していることを再確認できました。

学会では、急性期領域の学生教育に関する演題が他にもみられ、国際的にも注目が高まっているテーマであると改めて実感しました。類似した研究に取り組む発表者にアプリを通じて連絡を取りましたが、残念ながら返答を得ることはできませんでした。しかし、今後も国際的な研究ネットワークを広げていく重要性を認識するきっかけになりました。

総じて、ePoster 形式の制約はあったものの、助成金をいただいたことで国際的な作業療法教育の現状を直接知る機会を得られ、日本の急性期作業療法教育が抱える課題と可能性をより明確に整理することができました。今回得られた知見や視点は、今後の教育・臨床・研究活動に確実に還元していきたいと考えております。助成金によって得られた経験は、私自身の活動のみならず、日本の急性期作業療法の発展にも寄与できるものと感じており、今後も国際的な視点を持ちながら研鑽を続けてまいります。

3. 文献

- 1) Bose, P., & Hreha, K. (Eds.). (2020). Occupational therapy in acute care (2nd ed.). AOTA Press.

4. 論文掲載情報（学術雑誌に投稿し、論文掲載された場合に記載）